

第7回 『落窪物語』

次の文章は、『落窪物語』の一節で、「落窪の君」が父である「おとど」から声をかけられた場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

つとめて おとど、^{注1}樋殿におはしけるままに、落窪をさしのぞいて見たまへば、^ウなりのいとあしくて、さすがに髪^ハのいとうつくしげにてかかりてゐたるを、あはれとや見たまひけむ。「身なりいとあし。あはれとは見たてまつれど、まづやんごとなき^ア子どものことをするほどに、え心知らぬなり。よかるべきことあらば、心ともしたまへ。かくてのみいまするが、いとほしや」とのたまへど、恥かしくて、物も申されず。帰りたまひて、^{注2}北の方に、「落窪をさしのぞきたりつれば、いと頼み少なげなる。白き袷一つをこそ着てゐたりイ。子どもの古着やある。着せたまへ。夜いかに寒からむ」とのたまへば、^オ北の方。「常に着せたてまつれど、はふらかしたまふにや、飽くばかりもえ着つぎたまはぬ」と申したまへば、「あなうたてのことや。^エ親にとくおくれ、心もはかばかしからずぞあらむかし」といらへたまふ。

^{注3}婿の少将の君の表の袴、縫はせにおこせたまふとて、「これはいつよりもよく縫はれよ。^{注4}禄に衣着せたてまつらむ」とのたまへるを聞くに、^オいみじきこと限りなし。いとく清げに縫ひ出でたまひつれば、^カ北の方、よしと思ひて、おのが着たる綾のはり綿の萎えたるを着せさせたまへば、風はただはやになるままに、「いかにせまし」と思ふに、「少しうれし」と思ふぞ、心地の屈しすぎたるにや。^キこの婿の君は、あしきこともかしがましく言ひ、よきことをばけちえんに誉むる心ざまなれば、「この装束ども、いとよし。よく縫ひおほせたり」と誉むれば、^{注5}御達、^ク北の方に、^キかくなむと聞ゆれば、「あなかま、落窪の君に聞かすな。心おごりせむものぞ。かやうの者は、屈せさせてあるぞよき。それをさいはひにて、^コ人にも用ゐられむものぞ」とのたまへば、^{注6}御達、まふかな「あたら君を」と忍びて言ふもありかし。

語句

ままたに「儘に随に」①心のままたに。にまかせ。

へ成り行きにまかせるナマク

②うにつれへ事態の進行につれ一次の事態が起るナマク

③くのとおりにへある状態・動作のとおりであるナマク

④くのへ原因・理由を表す

なり「形態」①物のかたち。からだつき。

②身なり、服装 ③ありさま、ようす。

たのみ「頼み」①頼むこと。また、頼りとする物や人。

はふらかす「放らかす」①動へがすは接尾語。ほうり出す。

うたへ「形」うたへしの語幹。気味が悪い。いやだ。

とく「疾く」①早く ②すげにとく。

おくる「後る」①おくれる。後に残る。②死におくれる。

はかばかし「果果し」①「キ」はキレている

②きわだっている ③頼もしい。しっかりしている

おくす「潰す」①こちらへ送っていく。よこす。

②(他)の動詞の連用形に付いてこちらへくする。

「こちらをくする。へむくうからこちらへ動作を及ぼす」

。きす「着す」①動。着せる。身に付けさせる。

。けちえんなり「掲馬なり」①動。非常にはつきりしているナマク

。「あたらし」惜し①形。惜しい。もったいない。

。「あらたし」新し①形。新しい。新鮮である。